

大政奉還と「職制案(新官制擬定書)」

——「公議」の人事——

寺島宏貴

I. はじめに

19世紀第3四半期、日本の大規模な政治変動は、旧体制の打倒を企てた勢力のクーデタによって新政権の誕生をもたらした。慶應3年(1867)12月8日の御所で新政府が発した「王政復古の大号令」は摂関制と徳川体制とを廃し、それらに代わる総裁・議定・参与という「三職」の創設とともに、

諸事、神武創業の始めにもとづき、搢紳(しんしん)・武弁・堂上(とうしょう)・地下(じげ)の別なく至当の公議を謁(つく)し、…

一、旧弊御一洗につき、言語之道を洞開(とうかい)せられ、見込これある向きは、貴賤に拘わらず忌憚なく献言せらるべし。かつ、人材登庸第一の御急務…^{*1}、と宣言した。王政に復した政体は、この号令にあるように「公議」、公に政治的議論を尽くすという。諸勢力が政治問題を公論に訴え打開しようとする運動は、幕末に絶えず繰り返された^{*2}。上の宣言は、公卿・武家・殿上人・地下官人の別を問わぬ「至当の公議」、下位の諸階層から統治者に意見を上げる言路洞開の名のもと、急務は人材登庸という。クーデタ翌日の12月9～27日の間に、皇族・公家・雄藩の藩主・藩士44名が三職に任じられている(表1)。

本稿は、復古政府に端を発した新政体の基とされる「職制案」^{*3}の成立について考える。この史料は徳川慶喜の大政奉還直後である慶應3年10月中旬、三条家の家士であった尾崎三良(この時戸田雅楽を名乗った。本稿は文脈に応じて尾崎・戸田の二姓で呼び分ける)が^{*4}、坂本龍

^{*1} 東京大学史料編纂所蔵『『復古記』原史料』XXII—①6—48。本稿では史料引用に際し原則、新字に改め、句読点・濁点・中点を付した。引用史料中の〈 〉内は割書、[]内は筆者注記を表す。また日本史籍協会叢書については一部を除き、1967年から1977年に東京大学出版会より発行された覆刻版を使用する。

^{*2} 幕末政治では「文明」のルールである「公議」の原理が、西洋の政治理論を伴いつつ主張された。それは、いま一つの原理である「国民」の選挙によって選ばれた議会が国家の決定に参与し、「議員の選挙にあたっては、その他の時においても、「国民」は公に国政を論じ、批判する資格を持つ」ルールである(三谷博・山口輝臣『19世紀日本の歴史—明治維新を考える』放送大学教育振興会、2000、20頁)。

^{*3} 他に「新官制案」や「新官制擬定書」といった呼称があるが、本稿では原則、後述する『尾崎三良自叙略伝』中の標題である「職制案」と呼ぶ。

^{*4} 尾崎三良(1842-1918)は明治期の法制官僚・政治家として知られるが、幕末期は三条に従って尊王攘夷運動に投じた(『尾崎三良』臼井勝美他編『日本近現代史人物辞典』吉川弘文館、2001)。しかしⅢ-1に述べるように慶応3年時の尾崎は、三条ともども開国親論に転ずる。尾崎を扱った論考は明治期に関するものが多数ある(西尾林太郎「明治初年における貴族制度・上院の導入に関する覚書—尾崎三良と「通欽社」」『早稲田政治公法研究』8、1979・守屋研二「社会の急変動期におけるホワイトカラーの職業的生きがい感の変質過程—明治期政治エリート・尾崎三良の場合(1・2)」『応用社会学研究』21・22、1980～1981・山室信一『法制官僚の時代—国家の設計と知の歴史』木鐸社、1984・同『近代日本の知と政治—井上毅から大衆芸芸まで』木鐸社、1985・森岡清美「一勲功華族における妻と妾—男爵尾崎三良の場合」『淑徳大学社会学部研究紀要』32、1998・後田多敦「尾崎三良の聞得大君殿官幣社列格案」『歴史評論』631、2002・割田聖

馬ら土佐藩士と共に起草した案である。坂本の「船中八策」（同6月15日）と「八義」*5（同11月上旬）の間に位置する。この案には、徳川から政権を返上された朝廷に近く成立すべき新体制と、これに参画する皇族・公家・諸大名・有力藩士の名が挙がっている。

以下、Ⅰで「職制案」の史料情報と研究史とを記述しつつ、内容と作成経緯とを押さえておく。Ⅱでは、①主たる作成者の戸田雅楽と②その当時の地域的な政情から、「職制案」を政治史に位置づけてみたい。②は、文久3年（1863）8月18日の政変による「七卿落ち」後、三条実美を始め5人の公家の筑前太宰府滞在を指す*6。戸田は、「職制案」で自身の主人である三条を関白に擬した。

三条ら五卿勢力は、王政復古を機に帰洛が許されるまで、長州藩および太宰府・延寿王院に留まり、官位復旧を狙い続けた。この時期には更に、土佐藩主山内豊信やその家臣後藤象二郎らが「王政復古」を旨とした大政奉還運動を展開した。それは上下の「議政所」における士大夫の議事を旨とする公議政体論である*7。この運動は慶応3年10月、徳川慶喜による大政奉還の上表と将軍職の辞退に結実した。「職制案」は、慶喜を関白の輔佐役たる内大臣に想定している。

「職制案」の原典は、その存在が確かではない。しかし、新たな政治での「公議」を実際に動かそうとする意識が、同案に認められる。この見地から王政復古後の「公議」に見通しをつけるのが、本稿の目ざすところである。

表1 王政復古時の三職制

官職	出身	姓名
総裁	皇族	有栖川宮熾仁親王
		仁和寺宮嘉彰親王
	公家	山階宮晃親王
		中山忠能
		正親町三条実愛
		中御門経之
	薩摩	長谷信篤
		岩倉具視
		三条実美
		徳川慶勝
議定	尾張	松平慶永
		浅野長勲
		山内容堂
		伊達宗城
	越前	島津忠義
		大原重徳
		万里小路博房
		橋本実梁
	安芸	正親町公董
		烏丸光徳
		西園寺公望
		東久世通禧
	土佐	岩下方平
		西郷隆盛
		大久保一蔵
		福岡孝弟
	薩摩	後藤象二郎
		神山郡廉
		田中不二麿
		田宮如雲
参与	尾張	丹羽淳太郎
		荒川甚作
		林左門
		辻将曹
	安芸	久保田秀雄
		桜井与元憲
		中根雪江
		酒井十之丞
	越前	由利公正
		毛受鹿之助
		溝口孤雲
		津田信弘
	肥後	十時摂津
		戸田忠至
	柳川	
	高德	

上表は慶応3年（1867）12月9～27日の間に登庸された官員一覧。作成にあたり松尾正人『維新政権』（吉川弘文館、1995）所載表「慶応3年中の三職官員一覧」（20頁）に依拠し、同表を再構成した。

史「明治官僚の見た沖繩一尾崎三良「沖繩県視察復命書」の叙述から」『南島における民族と宗教』21、2012など。幕末期における尾崎の政治活動、ないしは彼の経歴全体に及ぶものは未だない様である。

*5 いわゆる「新政府綱領八策」であるが、本稿は松浦玲『坂本龍馬』（岩波新書、2008）での称呼に拠る。

*6 ほかに三条西季知・東久世通禧・壬生基修・四条隆調。途中、沢宜嘉は生野の変に加わり、錦小路頼徳は元治元年（1864）に卒去。太宰府への五卿動座は、第一次長州征討後の慶応元年（1866）2月、長州藩によって行われた。

*7 「山内豊信上書」（慶応3年9月）『徳川慶喜公伝』7（洪沢栄一著、竜門社、1918）所収。

Ⅱ. 「職制案」について

1. 史料情報

まず「職制案」の作成年月日は「坂本龍馬海援隊始末」では慶応3年(1867)10月16日となっている、しかしその根拠は不明であり、おそらく同案は大政返上後の10月中旬頃に作成されたと考えられる^{*8}。作成者は三条家家士戸田雅楽、および土佐藩士坂本龍馬他2名かと推定する。この2名は『坂本龍馬関係文書』1・2での記述により、坂本の海援隊で活動を共にした中島作太郎(=信行)、岡内俊太郎である。同案を掲載する各種の刊行史料を読む限りでは、戸田が坂本・中島・岡内の目の前で起草しこれを手控(メモ)として残したか、あるいは戸田・土佐藩士が共同で作成した可能性がある。作成場所は京都河原町三条下ル、醤油商の近江屋(同年11月15日に坂本が暗殺された店)である。

2. 史料の種別と原型

「職制案」の原史料は現在のところ所在不明である。「職制案」は近現代の文献に収録されており、それぞれ標題・記載内容が異なる。収録史料については後述する船津(1971)^{*9}の分類を踏まえ、以下A・B種に大別した(各種の異同は表2を参照のこと)。このうちAa'・Aa"・Ab'・Ac・Ad・Bb'は今回、新規追加の典拠である。

(Aa1)『尾崎三良自叙略伝』(非売品、1916)、109頁・『同』上巻(1977)、90~91頁(文庫版上巻、92~93頁)^{*10}。尾崎の晩年、75歳の時に著された自叙伝である。

(Aa2) 維新史料編纂事務局編『維新史』5(1941)、29~30頁。尾崎の自叙略伝からの引用と思われる。

(Aa') 男爵尾崎三良述「維新前実歴談(七卿落の事実談)」維新史料編纂会編『講演速記録』第8輯(1914)^{*11}。大正3年(1914)12月刊行。温知会で同年9月23日に行われた講演の速記録である。このとき73歳の尾崎は、貴族院議員の傍ら維新史料編纂会委員であった^{*12}。上記Aa1は、この講演を元にしたとされている^{*13}。

^{*8} 『坂本龍馬関係文書』2(日本史籍協会編)、288頁。

^{*9} 船津功「『大政奉還』をめぐる政権構想の再検討—坂本龍馬「新官制案」の史料批判を中心に」(『歴史学研究』375、1971)。

^{*10} 上・中・下三巻を中央公論社より刊行。のち中公文庫版、全三巻(1980)。本稿では文庫版から引用する。『自叙略伝』は、尾崎の誕生から明治6年(1873)の英国から帰朝するまでの部分が^{大正5年}大正5年(1916)に印刷され、数十部がごく近親の者に配布された。尾崎が自叙伝を思い立った動機は、子息^{ウヰルヘルム}洵盛の中学校教科書であったベンジャミン・フランクリンの自伝を熟読したためだという。三良は洵盛を召し、朝夕口授筆記して自叙伝の初編が出来上がった後、洵盛の学業多忙・任官外国渡航等によって自ら執筆した。明治6年(1873)から38年(1905)までが未刊原稿として残されたのは、洵盛が、原稿に少なからず「現存諸家の内事および批評」が含まれる点を憂慮したためである。将来的な散佚の危機から、自叙伝の全体は昭和52年(1977)に三良の孫春盛の手で公刊をみた(以上、尾崎春盛「まえがき」前掲『自叙略伝』上、8頁)。

^{*11} のち『維新史料編纂会講演速記録』3(東京大学出版会、1977)所収。

^{*12} 尾崎の経歴は『尾崎三良日記』上(伊藤隆・尾崎春盛編、中央公論社、1991)所収「年譜」(西川誠)に拠る。

^{*13} 藤井貞文「解題」(上記『維新史料編纂会講演速記録』3、552頁)。

表2 「職制案」の種別

種別	A (尾崎三良関係)					B (坂本龍馬関係文書・瑞山会)				
	Aa	Aa' Aa''	Ab	Ab'	Ac	Ad	Ba	Bb	Bb'	Bc
出典	Aa1 自叙略伝(1916/1977) Aa2 維新史 (1941)	維新前実歴談 (1914)	王政復古の端緒 (1899)	自叙傳 (年未詳)	官制改革事情一斑 (1879)	坂本龍馬伝草稿 (年未詳)	尾崎手控 (年未詳)	海援隊始末 (年未詳)	同左・初稿・甲 (年未詳)	維新士佐勤王史 (1912)
標題	職制案	〈三条実美〉	同左		太政官	なし			なし	
関白	三条実美	三条実美		三条実美					(三条実美)	
内大臣	徳川慶喜	〈徳川慶喜〉		徳川慶喜					記載なし	
議奏	(有栖川宮) (仁和寺宮) (山階宮) (島津) (毛利) (越前春嶽) (山内容堂) (鍋島閑叟) (徳川慶勝) (伊達宗城) (正親町三条) (中山) (中御門) 等	有栖川宮 仁和寺宮 島津 毛利 越前春嶽 山内容堂 鍋島閑叟 正親町三条 中山 中御門 等	(有栖川宮) (仁和寺宮) (山階宮) (島津) (毛利) (越前春嶽) (山内容堂) (正親町三条) (中山) (中御門) (等)	毛利 島津 容堂 蜂須賀 春嶽 閑叟 宇和島(宗城) 岩倉 鳥丸 東久世 嵯峨	毛利敬親 島津久光 山内容堂 松平春嶽 鍋島閑叟 蜂須賀茂韶 伊達宗城 岩倉貞規 嵯峨実愛 東久世通禧	(島津) (毛利) (山内) (伊達宗城) (鍋島) (春嶽) (岩倉) (東久世) (嵯峨) (中山)				(島津) (毛利) (山内) (伊達宗城) (越前春嶽) (鍋島閑叟) (岩倉) (東久世) (嵯峨) (中山)
		(岩倉) (東久世) (大原) (長岡良之助) (西郷) (小松) (大久保) (木戸) (広沢) (横井) (三岡) (後藤) (坂本) 等	岩倉 東久世 大原 長岡(良之助) 西郷 小松 大久保 木戸 広沢 横井 三岡 後藤 坂本 等	Aaに同じ			(小松) (西郷) (大久保) (木戸) (後藤) (坂本) (三岡八郎) (横井平四郎) (長岡良之助) 等	(小松) (西郷) (大久保) (木戸) (後藤) (坂本) (三岡八郎) (横井平四郎) (長岡良之助) 等	(小松) (西郷) (大久保) (木戸) (後藤) (坂本) (三岡八郎) (横井平四郎) (長岡良之助) 等	Bbに同じ
参議										
六官										
	神祇官 内国官 外国官 会計官 刑部官 軍務官 「以下略す」		同左	記載なし	「以上」	記載なし	「以下略す」	記載なし	記載なし	「以下略す」

上表は船津(1971)所載表の分類を踏まえ、新たに史料を追加のうえ作成。表中の丸ガッコは史料各種で人名および六官に付されたもの。またAb・Bcの人名については、尾崎案の説明文に列挙してあるものを記入した。なお表中の〈 〉内は訂正、[]内は訂正、()内は筆者注記を表す。

(Aa)『維新前実歴談 尾崎男爵談』3止(東京大学史料編纂所蔵・維新史料引継本—Iは—78)。Aa'の筆記原稿である。原稿用紙を糸綴じ、全43丁(うち罫紙1丁)。同じく原稿用紙を用いた表紙有。温知会の筆記者によるペン書原稿の全体に、尾崎のものらしき校正(墨・朱筆)有。「職制案」のそれについては、誤記訂正を除き、Aa'と大きな違いはない。また大幅な加筆を要する箇所罫紙を貼って補足してある。巻末に補足用として綴じた罫紙に朱書「温知会寄贈」、朱印「維新史料編纂会」。年代は未記載ながら、大正3年9月から11月頃か。

(Ab)「王政復古の端緒附十九節」『史談速記録』第79輯、19～21頁(明治32年(1899)3月11日)。尾崎が貴族院議員在職時、58歳の頃の口述である。

(Ab')「自叙傳 自慶応三年八月 至洋行顛末」(国立国会図書館憲政資料室蔵「尾崎三良関係文書」153)。400字詰め原稿用紙を紙縫綴じ、全29丁。同じく原稿用紙を用いた表紙・裏表紙有。尾崎自筆とみられる毛筆書きであり、かつ朱墨の校正有。「職制案」には校正なし。文体、語彙、話の展開からしてAbの原稿と推測される。

(Ac)「大政返上後官制改革事情一斑」(上記「尾崎三良関係文書」155)。尾崎の著述であることから、Acに配した。明治12年(1879)1月、法制局主事であった38歳の尾崎自筆と思われる。太政官の罫紙用箋を紙縫綴じ、毛筆書き、全4丁。表紙はなく、標題は関係史料の整理時に付されたものであろう。全体にわたり墨書による校正跡、また付箋貼付のうえ訂正有。現在のところ最も慶応期に近い史料だが、しかし作成目的や掲載先・出版形態ともに判然としない^{*14}。また本史料は、時期を大政返上前後(慶應3年8～12月)に限定し、当時の政治情勢と尾崎の動向を叙述している。最大の特徴は、「職制案」の掲載を主目的とした構成である。ただし同案の標題は「太政官」とあるから、新たな復古太政官制を念頭に考案された点を窺わせる。またAa・Abとは職制の記載や人名の配列を異にし、他史料にない人物が2名含まれる(後述)。最終丁裏に、次のように断り書きされている(取消線は原文ママ)。

右ハ匆々ノ際筆記ナシ、惟ニ記憶ニ依テ之ヲ叙ス。其文字、人名等ニ至テハ小異ナキ能ハストイヘトモ、其大体ノ事実ニ於テハ肝胆ニ銘シテ忘レサル所ナレハ、粗齟ナキコトヲ信スルナリ。~~且京師滞在中ハ土佐藩小澤庄次ト偽称ス~~ 明治十二年一月筆記 尾崎三良誌。

(Ad)「坂本龍馬伝草稿」『坂本龍馬全集(増補四訂版)』(平尾道雄監修、宮地佐一郎編・解説、光風社出版、1988)、1023～4頁。作成年代は不明。昭和57年(1982)に本史料を取材した松岡司によると罫紙毛筆書き130枚、伯爵佐佐木家の蔵書印が捺され、作者は士階級の教養人であろうかという(1027頁)。伝記原稿ながら人名がAcに重なるためAdとした(ただし坂本の名は見えない)。両史料の関連については今後の精査を要する。

(Ba)「尾崎三良手控」『坂本龍馬関係文書』1(日本史籍協会編・発行、1926)、414～5頁。作成年代は不明だが、「三条実美公実歴絵巻物草按ヲ為ス一部ノ記事」との前置きから、明治26

^{*14} 同時期、『復古記』の編纂事業を進める太政官修史局に提出された資料の草稿であろうか。明治22年(1899)に政府の編纂事業により成立した同書は、政府自らの勝利を編年体で記録した「正史」である(永原慶二『20世紀日本の歴史学』吉川弘文館、2003、12頁)。しかし同書に「職制案」は収録されておらず、編纂時に史実としての判断が見送られたと看取される。

年(1893)夏以降の作成と思われる。尾崎の手控とあるため A に分類することも可能であるが、B 種史料は相互に関連する都合上、船津(1971)を踏襲した。出典は「瑞山会文書」。

(Bb)「坂本龍馬海援隊始末」(坂崎紫瀾編、年未詳)『坂本龍馬関係文書』2(同上)、288～9頁。「慶応三年丁卯十月十六日、龍馬ハ戸田雅楽ト謀リ新官制ヲ擬定ス」(288頁)との網文があり、ここから「新官制案」や「新官制擬定書」という呼び方が生じたのかも知れない。

(Bb')『坂本龍馬海援隊始末 初稿』3止(東京大学史料編纂所・維新史料引継本—Ⅱい—3一甲)。初稿原本と思われるものを甲(編纂所の出版事項は写本)、謄写本を乙として所蔵。甲は、維新史料編纂会事務局の原稿用紙を糸綴じ、毛筆書き、全28丁。同じ原稿用紙を用いた表紙・裏表紙、維新史料編纂会の新表紙、東大史料の後表紙有。原表紙の標題は「坂本龍馬海援隊始末 初稿三 坂崎斌編〔朱〕自慶応三年丁卯九月至全年十二月晦日」。ほとんど校正がない一方、尾崎案のみ朱で^{みせけち}見消が入る。乙の詳細は略す。

(Bc) 瑞山会編『維新土佐勤王史』(富山房、1912)、1193～4頁。瑞山会編とあるものの、同書の実質的な著者は Bb と同じく坂崎紫瀾である。

以上 A・B を作成年代の順にみると、Ac は明治・大正期を通じて著された尾崎の回想における「職制案」の初見である。本稿は、この Ac を「職制案」の原型とする。

一方、史料 B は慶喜(内大臣)、皇族(議奏)、坂本(参議)の名がないものを含んでいる。列挙された人数も A に比べると少数で、また「六官」も未記載である(表2参照)。とりわけ Bb・Bc は、その作者坂崎紫瀾が潤色した疑いがある(この点はⅡ-4に述べる)^{*15}。これらに鑑みて、本稿では尾崎の著述であることを確実としうる A を主に扱う。

3. 先行研究

次に「職制案」の研究史を整理する。幾多の文献が同史料を取り上げてきたが^{*16}、以下では史料批判に付した船津功(1971)、石井孝(1972)、またこの二者とは対照的な説を唱える原口清(2000)を取り上げる^{*17}。いずれも「職制案」を坂本の構想と解し、尾崎(戸田)や同案の成立事情には立ち入っていない。

まず船津は、既述のように史料を A・B に分類した上で、同案の原型は B とし、Ba の「尾崎三良手控」が Bc に影響したと推定する。A については慶應4年(1868)正月17日の「三職七科」の制から潤色されたとみなし、その経路は「坂本案→これを参照した福岡孝弟の七科原

^{*15} 先記のように『坂本龍馬関係文書』は Ba・Bb とともに収載する。同文書の編者岩崎英重(鏡川)は能う限り関係史料を収める方針をとったものと思われる(参照、前掲松浦2008、172頁)。

^{*16} 千頭清臣『坂本龍馬』(博文館、1914)、尾佐竹猛『明治維新』下2(『尾佐竹猛著作集』17、ゆまに書房、2006、初刊1949)、井上清「坂本龍馬—変革期の先駆者」『新版日本の思想家』上(朝日新聞社、1975、初出1962)、池田敬正『坂本龍馬』(中公新書、1965)、平尾道雄『坂本龍馬海援隊始末記』(中公文庫、1976、初刊1968)、飛鳥井前掲『坂本龍馬』(講談社学術文庫、2002・初刊1975)、同「『奉還』と『討幕』—坂本龍馬の三つの文書」(『人文学報〈京大〉』41、1976)、松浦玲『検証・龍馬伝説』(論創社、2001)・同前掲『坂本龍馬』など。

^{*17} 前掲船津1971、石井孝「船津功氏『大政奉還』をめぐる政権構想の再検討」を讀んで(『歴史学研究』380、1972)、原口清「王政復古小考」(『王政復古への道(原口清著作集2)』岩田書院、2008・初出2000)。

案→七科→Aの六官」であるという。Aが慶喜を内大臣に擬したのは後に彼が恭順したため、ここに王政復古史観^{*18}が影響した。またAは全体に整いすぎて、Bの簡略な形式は坂本の新政府綱領八策に通じるとする。

石井は、船津の史料読解を「恣意的」として退け、Aが原型であるという。Aでの皇族起用は王政復古史観の影響ではなく、宮と公卿の間に一線が画されていないのは公家社会の実情に合わない。公家社会では議奏と参議との間に一線がある。Bでの皇族と慶喜の削除こそ、王政復古史観の影響とする。またAに幕臣の起用がない点に坂本の深意があり、武力倒幕の契機を孕む。またB作成の際、Aの意識的もしくは無意識的な削除が加えられたのではないかとする。

最後に原口は、案の存在自体に否定的である。というのも、慶応3年11月15日に暗殺された坂本はクーデタ以後の政体を予期できない^{*19}。また摂関・幕府は武力倒幕派にとって否定の対象であるから、クーデタをもって官位復旧となる三条の関白就任は考えられない。クーデタ翌日の宮・公卿の人事（12月9日）では、前者のうち有栖川宮・仁和寺宮は以前から薩・長・越と親交がある。後者は、慶応3年4月5日の議奏後任人事（本稿Ⅲ-2で取り上げる）で薩摩ほか四藩から推薦があった者である。また参与は12月12日に各藩から3名ずつ、公議政体派を中心に選出された。したがって、「坂本案が、各藩の参与候補者に影響を与えることなど、まったく不可能であろう」^{*20}という。

4. 史料の構成

(1) 史料 Aa

ここで「職制案」の内容を確認したい。下記はAaの『尾崎三良自叙略伝』上巻（中公文庫版）、92～93頁掲載史料を底本に用い、A・B各種の記載内容を踏まえ再構成したものである。

以下、〔 〕内は筆者による注記を示す。

〔Acは標題「太政官」、Bは標題なし〕

職制案

〔Bcは簡条書き（一つ書き）形式〕

関白 一人

公卿中、最も徳望智識兼備の人を以て之に充つ。上一人を輔弼し、万機を関白し、大政を総裁す。

〔Abに三条の記載なし〕

暗に三条公〔実美〕を以て之に擬す。

〔Bは内大臣を除外〕

内大臣 一人

公卿、諸侯中、最徳望智識兼備の人を以て之に充つ。関白の副貳とす。

^{*18} 六国史を継承した新しい天皇政権が国家統治の正統性を保有することを、歴史によって示す史観である（前掲永原2003、12頁）。

^{*19} 坂本と戸田とは、三条家侍女の平井加尾（勤王党の同志平井収二郎の妹）を通じて連絡ができていた程度とする指摘もある（前掲飛鳥井1976、65頁）。

^{*20} 前掲原口2008、323頁。

[Ba・Bbに慶喜および内大臣の記載なし]

暗に徳川慶喜を以て之に擬す、時に内大臣たり。

議奏 若干人〔Bは皇族を除外〕

親王、諸王、公卿、諸侯の中最も徳望智識ある人^[Bに記載なし]を以て之に充つ。^[B「尤も」]^[B「者」]

可否を献替し、大政を議定敷奏し、兼て諸官の長を分掌す。^[B「万機」]

〔議奏には、官方には有栖川宮、仁和寺宮^[Ab「小松宮」]〔嘉彰親王〕、山階宮^[Aa・Abに記載無]〔彰親王〕。諸侯には島津〔久光〕、毛利〔敬親〕、越前春嶽〔松平慶永〕、山内容堂〔豊信〕、鍋島閑叟〔直正〕、徳川慶勝、伊達宗城。公卿には正親町三条^[Abに記載無]〔嵯峨〕〔実愛〕、中山〔忠能〕、中御門〔経之〕等を以て之に擬す。〕〔AcとBは宮の記載無。Bは正親町三条の前に岩倉（具視）、東久世（通禧）が入る〕

参議 若干人

公卿、諸侯、大夫、士庶人の才徳ある者^[Bに記載無]を以て之に充つ。大政に参与し、兼て諸官の次官を分掌す。

〔岩倉、東久世、大原〔重徳〕、長岡良之助、西郷〔吉之助〕、小松〔帶刀〕、大久保〔一蔵〕、木戸〔準一郎〕、広沢〔真臣〕、横井〔平四郎〕、三岡〔八郎〕（由利〔公正〕）、後藤〔象二郎〕、福岡〔孝弟〕、坂本^[Bb・Bcに記載無]〔龍馬〕〕等を以て之に擬す。

此外、六官を置き諸政を分掌す。

神祇官 内国官 外国官

会計官 刑部官 軍務官

以上長官は親王、諸王、公卿、諸侯を以て之に任じ、次官は公卿、諸侯、大夫、士庶人を以て之に任ず。

其親王、諸王、公卿、諸侯にあらざれば、長官に任ぜざる者は親を親しみ、大臣を敬する所以なり。大夫、士庶人と雖も、次官に任ずることを得るは、賢を貴ぶ所以なり。

以下略す。

(2) 史料 Ac

次に、本稿が「職制案」の原型とみる Ac の全文も掲げよう。本史料の後半以降は文書の引用というよりも、むしろ、その当時尾崎が思案したことを説明するといった趣である。他種史料についても文書を引いたのか、尾崎の構想をなぞったものかが判別不能と映る。また本史料には先に引いた通り、人名に「小異ナキ能ハス」との断り書きがある。他種を含め、職制の「案」である以上は人物の登用例を示すに留まる。明治12年で既に尾崎は記憶に頼っているため、もともと原本は存在しないか、あるいは失われたのであろう。A・Bともに整った体裁とは言いがたい。

以下、取消線は原文での削除、黒丸は同じく墨塗りを表す。また（ ）内は加筆訂正、〔 〕内は筆者による注記である。

太政官

関白 一人

親王、公卿、諸侯ノ名望アルモノヲ以テ之ニ充ツ。

至尊ヲ輔翼シ、万機ヲ関白ス。

内大臣 一人

親王、公卿、諸侯ノ名望アルモノヲ以テ之ニ充ツ。

関白ノ副貳トシ、万機ヲ賛助ス

議奏 員数ナシ

親王、公卿、諸侯ノ才徳アルモノヲ以テ之ニ充ツ。

万機（諸政）ヲ議定シ、兼テ海・陸軍、会計、外国等ノ諸官（職）長官ヲ分任スヘシ。

参議 員数ナシ

諸王、公卿、諸侯、大夫、士庶人ノ才能アルモノヲ以テ之ニ充ツ。

万機ニ参与シ、兼テ海・陸軍、会計、外国等ノ諸職長（次）官ヲ分任スヘシ。

○其親王、公卿、諸侯ニアラサレハ、議奏以上諸官ノ長ニ任セサルハ、親ヲ親ミ大臣ヲ敬スルノ意ナリ。其士庶人トイヘトモ、参議諸官ノ次長タルヲ得ル（ハ）、広ク天下ノ賢オヲ登庸スルノ意ナリ。今試ニ其任ニ当ルモノ、姓名ヲ記セン。

関白 三条実美

三条氏ハ夙ニ王威ノ振ハサル慨憤シ、殊ニ先帝ノ叡慮ヲ奉シ、百艱ヲ冒シ云々。大ニ天下ノ望ヲ掲ケリ。此人ヲ除キ他ニ需ムヘカラス。

内大臣 徳川慶喜

徳川氏一旦方向ヲ誤ルトイヘトモ、即今悔悟ノ功実効顕レ、数百年●式微ノ王権ヲ復●シタルノ功アリ。且諸侯中ノ人物此人ヲ棄テ、他ニ需ルナシ。今日更始彼我ノ別ナク公明正大ナルヲ天下ニ表示スルニ足ラン。

議奏

毛利 島津 容堂

蜂須賀〔茂韶〕 春嶽 閑叟

宇和島〔伊達宗城〕 岩倉 烏丸〔光徳〕

東久世 嵯峨

参議

西郷 小松 後藤 木戸

大久保 ^{〔ママ〕} 阪本 横井平四郎

三岡 広沢 長岡良之介 ^{〔マ マ〕}

山内兵之介 ^{〔マ マ〕} 〔豊積〕

以上

(3) 官職と人事

① 関白 (1名)・内大臣 (1名)

関白については「徳望智識兼備の人を以て之に充つ。上一人を輔弼し万機を関白し大政を総裁」するものとして、新たな関白へ三条を「暗に」補す。天皇を輔弼する役割と、大政の全てを統括する重職を担う。前記「王政復古の端緒」(Ab)では「草案を拵えた精神」として、

関白には條公〔三条〕を用い、内大臣は徳川慶喜を用うるという趣向であった、…徳川は他の諸侯と同じように見ねばならぬ、然らば徳川は諸侯の中で人物である、旁々以て朝廷の政の枢要の地に置いて宜い、故に將軍は辞しても内大臣を持って居るから徳川慶喜の当時に於て内大臣と称せしめて、敢て其官までも罷させなかったのも此内意で、予め是も後藤等と言ひ合わせたことである、朝廷で関白の次に置いたら宜かろう、関白は昔から公卿でなければならぬから公卿で以て取って、それで是迄の履歷といい、人望といい三条公を以て任じ公卿方の総代表者とし又た諸侯中の萃を取り、且は大名の総代表者としも見るべきものを用いて関白の次席として朝廷の枢機に置くが公平の処置であるという議論で、夫れには徳川内大臣は地位といい識量といい適當の人であるから之を用い、其次に議奏として親王公卿諸侯の人物を用い、参議としては公卿諸侯中の門地稍々卑きもの及び諸藩の陪臣等を網羅して朝政を総攬するという計画でござりました…^{*21}

右によると関白には三条を登庸し、内大臣は徳川慶喜にあてる。「関白は昔から公卿でなければならぬ」し、「是迄の履歷といい、人望といい三条公を以て任じ公卿方の総代表者」とする。

なぜ三条なのであろうか^{*22}。「ねばり強くまた機敏な手強い交渉相手」^{*23}たりえた岩倉具視ほ

^{*21} 「王政復古の端緒」(Ab)、23頁。

^{*22} 三条についての研究は、明治期の政治活動や伝記編纂に集中している(秋元信英『三条実美公年譜』の一考察 一巻4・19を中心にして)『日本歴史』450、1985・篠田孝一「明治太政官首班の三条実美」『藝林』50-1、2001・同「旧官制下の三条実美と岩倉具視」『霊山歴史館紀要』16、2003・佐々木隆「内大臣時代の三条実美」沼田編『明治天皇と政治家群像』吉川弘文館、2002など)。幕末における三条の政治意識を扱ったのは笹部昌利である(「幕末期公家の政治意識形成とその転回—三条実美を素材に」『佛教大学総合研究所紀要』8、2001)。笹部は徳富猪一郎(蘇峰)の評伝(『三条實萬公・三条實美公』梨木神社鎮座五十年記念祭奉賛会、1935)を踏まえる形で、三条における政治意識の「転回」は父・実万と三条家の家士富田織部からもたらされたとする。実万の主張であった朝廷政治の改革は実美の朝議改革運動に継承され、また文久2(1862)年9月の「攘夷別勅使」の任命は、本来的な政治意識とは異なる攘夷論者へと三条を押し上げた。

戦前、藤井甚太郎は幕末政治の「三中心」として「第一は岩倉具視・中御門経之らを中心とせる公卿の方々、第二は雄藩連合の中堅として薩長連合、第三には在太宰府五卿を中心とせる勢力」を設定した。「坂本龍馬は太宰府の五卿と往来し、既に慶応元年五月の下旬五卿を太宰府に訪ふて薩藩の形勢を説いて居る…斯の如くして此等三勢力は何時かは一団となって倒幕の大連盟とならねばならぬ」(『明治維新史講話』雄山閣、1926、120頁)。同様の点は久保利謙も指摘する(「幕末公家尊攘運動と三条実万・実美父子」田中彰監修『七卿回天史絵巻・別冊』マツノ書店、1994)。また杉谷昭は、幕末政治において皇族・公家の権威を仰ぐべく彼らを「動座」させる意義を認める。政治過程は権威が発現する場である(「幕末政治史における「動座」の視角」『諫早史談』41、2009)。太宰府では五卿が情勢探索を行い、その外部で諸士は五卿救援に向け周旋するとともに、五卿へ情報を頻繁にもたらした。藩への帰属意識とは別の「横議・横行」によって権威との接触が生ずる(参照、藤田省三『維新の精神』市村編『藤田省三セクション』平凡社ライブラリー、2010、初出1965-1966)。

^{*23} 佐藤誠三郎「岩倉具視」(同『死の跳躍』を超えて—西洋の衝撃と日本』千倉書房、2009・初出1983)。

どには、三条は「政治家として欲しいような資格」^{*24}を欠く。パースナリティの面で、三条と岩倉とでは際だった相異がみられるのである。しかし三条には、維新前後の幾多の政治主体と比べると豊かな政治資産が備わり、明治期に至っても一貫して政府の首班ないし上位にあり続けた^{*25}。幕末においては長州・薩摩といった特定の藩の手先として、藩の攘夷論を証明していくことによって三条の象徴性は高まるであろう^{*26}。

次に慶喜は内大臣とするという。戸田は、「大名の総代表者としても見るべきものを用いて関白の次席」に据え、「朝廷の枢機に置くが公平の処置」とした。慶応4年9月21日から現職の内大臣であったことが念頭にあると思われ、ここでは関白の「副貳」、すなわち関白に添い、これを輔佐するというべき職に充てている。「嵯峨実愛手記」では、慶喜の朝議参加を図るため内大臣就任が画策されているが、9月21日に実際に内府となった^{*27}。

しかしながら、A種のうち慶喜が当時の呼称（例えば「大樹公」や「内府公」）で記されず、伊達宗城^{むねなり}などと一緒に諱で呼ばれている。正親町三条実愛が「嵯峨」とあるのは、確かに石井のいうように、同史料の潤色（人名の追加）が明治以降であることを示す端的な証跡となろう。ただ各テキストに引用された人名は慶応3年時の通称、諱、近代の呼称が混在する。尾崎が回顧した当時の通称で呼ぶことも十分考えられる。

②議奏（若干人）・参議（若干人）

議奏には皇族・上級公家・大名、参議には下級の公家や武士が入る。いずれも「最も徳望智識ある人」が就く。議奏は「可否を献替し大政を議定敷奏し兼て諸官の長を分掌」する。上記

^{*24} 池辺三山（滝田樗陰編）『明治維新三大政治家―大久保・岩倉・伊藤論』（中公文庫、2005・初刊1912）、86頁。

^{*25} 前掲篠田2003のように三条は、同じ公家出身で明治政府のナンバー2というべき岩倉と比べられがちである。『経世評論』主筆として、平明達意の文で鳴らした池辺三山はこう評する。

三条公は藤原家である。清華の家柄だ。ことに三条公の先代実万卿は梨木神社という神様に祭られるほどの人で、なかなかの勤王家であった。そして先帝に仕えて随分働いた。官も内大臣でしょう。元来が大臣になれる家柄であり、その嫡子で、早くから長州派の勤王家と交わりを結んで、推し立てられることになった。そして維新後の政府で岩倉の上に立つことになったが、あの時代はまだ門地門閥の除れぬ時代だから、主にその方からのことではありませんか。そこで太政大臣は三条に落ちて、死ぬるまで三条公の方は官は上であった。また世の中でも三条岩倉といって岩倉三条とはいわない（前掲池辺2005、82～3頁）。

また維新史料編集会局員の中原邦平は次のように述べた。

全体三条公と岩倉公とは性質がまるで違うのでありまして、条公は玉の如き、岩公は剣の如しと…評がありますが、条公は実に精忠の人で純良無比の美玉であって、廟堂の棟梁たる器量がある。岩公は仕事師で盤根錯節一刀両断の才略があつて…誠に拙筆であるが口は中中の達者で時と場合に拠ると二枚の舌も使い兼ねまじきお方である。斯様な性質の違った人が合体して犬猿も啻ならざる薩長が連合した…（『坂本中岡両君と薩長同盟に就て』『坂本中岡両先生五十年祭記念講演集』同遭難五十年記念祭典会、1917、39頁）。

さらに徳富蘇峰は三条に対し「家訓を奉じ、相国として位人臣を極めた時に至りても、京都や、長州や、宰府にいた時と異なることなく、其の衣服、飲食、又は居邸に至るまで、専ら清儉簡素を主とし、毫も奢侈に流るるが如きことは無かった」と讃称する（前掲徳富1935、312頁）。

^{*26} 参照、前掲佐藤2009。この観点は三原迪夫も採っている（『維新を奪う―天皇史批判と講座派の克服』都市出版社、1971）。

^{*27} 「嵯峨実愛手記」（『史籍雑纂』2、日本史籍協会編）、慶応3年8月4・22・27日条。ただ、反幕公卿である三条は、「職制案」に内大臣慶喜の名があることを是認しないであろう。

の尾崎談話によると、「議奏として親王公卿諸侯の人物を用い、参議としては公卿諸侯中の門地少々卑きもの及び諸藩の陪臣等を網羅して朝政を総攬するという計画」であった。

議奏の人事には皇族が入り、議奏の中御門経之と参議の岩倉で区分される。Bでの議奏は有栖川宮熾仁親王など皇族は入らず、諸侯と諸卿とに大別している。Bではこの議奏人事に岩倉、嵯峨、東久世が加わるものの、Ba・Bbの根拠となった「尾崎三良手控」の原史料が確認できない。

またAcのみ議奏に復古政体の参与烏丸光徳（公家）、参議に山内容堂の実弟で、南邸山内家の当主かつ土佐藩主豊範の名代として政局に関わった山内兵之助（豊積）が入る。他方Adは後者を含むも、前者の名がない理由は今のところ不明である。Baは両者を含め点を除けば、Acの人事に重なる。AcがBaの原史料とは確定できないものの、尾崎はAcをもとにして手控をまとめたのであろう。

参議には、身分を問わず有用の人材を用いるとする。しかし朝廷で諸藩の陪臣や草莽が公卿と相並び、政務を行うのはおよそ考えられないことであった。戸田は「大名とか公卿とかいう人物に物を言うには次の間から平身低頭して物を言う時で、一所に並んでことを仕様という考えは毛頭起らぬ」という^{*28}。「それは必要であれども今ドウもそういうことは出来ぬ」という坂本に対し、戸田は、

それは出来ぬことはない、昔しは門地が低くして位の低い者が朝廷の議制を定めて参議の制を設け、是等の士人を朝廷の参議として用いたならば少しも差支はないではないかという、坂本はそういうことがあれば妙であるが、其職制というものは如何のものであるか試に拵えてもらいたい、そこで私が其時拵えた職制がある、それは職原抄及大宝令などを読み嚙って居りましたから、それこれを参酌して起草したのは則ち左の草案である^{*29}。

と、朝政参加の足がかりとして日本古代の参議制に引照している。

③六官

神祇官・内国官・外国官・会計官・刑部官・軍務官の六官を置き、これらが「諸政を分掌」する。長官の任には「親王、諸王、公卿、諸侯」が、次官には公卿、諸侯、また公卿に次ぐ「大夫」、そして「士庶人」が就く。この先は「以下略す」となり、A・Bいずれも後欠史料の疑いが残る。Aにおける「六官」の記載と三職七科の制とは、前者では神祇官を置き、後者では制度寮掛の設置が記された点を除き重複する（表2・表3）。しかしその裏付けを得られないため、福岡孝弟がAを参照した可能性があるというに留まる。

(4) 史料B種の改削

史料Bb・Bcでの、内大臣慶喜・参議坂本の除外について触れておこう。両史料の作者坂崎紫瀾（斌、1853-1913）は明治期、坂本の伝記を最初に著した人物である。明治15年（1883）、

^{*28} 「王政復古の端緒」（Ab）、18頁。

^{*29} 同上。

表3 三職分課（七科の制、慶應4（1868）.1.17）

七科	職名	姓名	七科	職名	姓名
総裁 同 副師（副総裁）	議定 同	有栖川帥宮（熾仁親王）	掛	同	伊達少将宗城朝臣
		三条前中納言実美卿		参与	東久世前少将通禧朝臣
		岩倉前中納言具視朝臣		同	後藤象二郎
神祇事務総督 掛	議定	有栖川中務卿熾仁親王	掛	同	岩下佐次右衛門
		近衛新前左大臣忠房公		参与	広沢兵助
		中山前大納言忠能卿		同	西郷吉之助
		白川神祇伯資訓王	兼制度・掛	議定	中御門中納言經之卿
		六人部雅榮		同	岩倉前中納言具視卿
		樹下石見守（茂国）		同	浅野少将茂勲朝臣
		谷森大和介（種松）		参与	西四辻大夫公業
内国事務総督 掛	議定	正親町三条前大納言実愛卿	兼制度・掛	同	三岡八郎（由利公正）
		徳大寺中納言実則卿		同	小原仁兵衛（鉄心）
	同	越前大蔵大輔慶永朝臣（松平慶永）	刑法事務総督 掛	議定	長谷三位信篤卿
	同	山内前少将豊範卿		同	細川右京大夫喜廷
	参与	辻将曹		参与	十時摂津
	同	大久保一蔵	制度寮総督 掛	同	津田山三郎
	同	田宮篤輝（如雲）		参与	鷹司前右大臣輔熙卿
	同	広沢兵介（ママ・真臣）			万里小路右大弁宰相博房朝臣
	同	神山佐多衛（郡廉）			三岡八郎
	同	中根雪江		同	福岡藤次（孝弟）
外国事務総督	議定	山階常陸太守晃親王		同	田中国之助（邦之輔）
	同	三条前中納言実美卿		同	楯取素彦

『雲上便覧大全 完』（池田東園編）、東京大学史料編纂所蔵本により作成。同大全は嘉永5年（1852）4月刊の増補改正版として、慶應4年（1868）2月に刊行された（六條御殿御蔵版）。巻末に朱印「御蔵版御印章」押捺。刊記に「江戸 須原屋茂兵衛」「皇都 村上勘兵衛」ほか11名記載あり。原形態は三ツ切横本の小型本。（ ）内は筆者による注記。

自由民権運動に関わった紫瀾は政府から民権講釈を罰せられた。翌16年（1884）、紫瀾は坂本の伝記小説である『汗血千里駒』を『土陽新聞』に連載し、その「稗史」よって政府批判を行う。「職制案」こそここに登場しないが、紫瀾は近世土佐での上士・郷土間の対抗を、同時代の藩閥対民党になぞらえる。その根深い対立を闘い、政治変革に投身する坂本を土佐民権の原像として描く政治小説である^{*30}。

『汗血千里駒』に発する紫瀾史学の集大成が、「職制案」を収める『維新土佐勤王史』（Bc）であった。紫瀾は20年余り土佐勤王党の精神とその学統の掘り起こしに注力し、同書は大正元年（1912）に刊行をみた。書名にある「勤王」とは「武臣干戈を執りて蹶起し、王愾に敵する

^{*30} 坂崎紫瀾『汗血千里の駒—坂本龍馬君之伝』（林原純生校注、岩波文庫、2010・初出1883）。司馬遼太郎に象徴される龍馬像の原点とされる続物である。参照、柳田泉「坂崎紫瀾について」（同『政治小説研究』上、春秋社、1967・初刊1940）・前掲飛鳥井『坂本龍馬』、19頁・『汗血千里駒』復刻版（雑賀柳香補綴、土佐史談会、1993）の解題（岡林清水）・上記『汗血千里の駒』解題（林原）。紫瀾とその作品については上記柳田1967に詳叙されている。なお司馬文学など戦後の龍馬像については、箱石大がマス・メディアでの受容と合わせ論じている（『坂本竜馬の人物像をめぐって』『歴史評論』530、1994）。

精神」^{*31}をいい、その系列に坂本龍馬も連ねられた。石井孝が見て取った王政復古史観は「勤王」史観と呼び直すのが適切であろう。

この歴史意識は「職制案」から慶喜をおそらく消去した。Bb・Bc いずれも作成時期は不明である一方、後者を年代的にみると、紫瀾は尾崎の「王政復古の端緒」(Ab) または「手控」(Ba) を参照しうる。Bb・Bc の議奏・参議人事は、坂本を除き Ba の「手控」に一致する。「手控」の出典は「瑞山会文書」とあり^{*32}、紫瀾は、慶喜を除きつつ Ba から人名を引き写したのであろう。しかし、Ab を参照して宮の削除を判断することも可能かも知れない。

問題は、同時に坂本の名も削られたことである。先掲の表2に示したように、史料 Bb' は「阪本」が朱で見消されている。他方、Bb' の謄写版(乙)は「阪本」に朱が入っておらず、刊記に「明治四十四年一月四日完了」とある(甲は刊記なし)。明治44年(1911)前後に見消が施されたのか、またそれが紫瀾の筆か否かは不明である。ただ紫瀾は「手控」から尾崎案を引き写した(Ba=Bb' の状態にした)のち、坂本を外した Bb・Bc を創案したのであろう。この削除については、大政返上後の官制案に坂本の名がないことを訝しんだ西郷隆盛に、役人を厭う坂本が「世界の海援隊」をやると言った話^{*33}との関連が取り沙汰される。『汗血千里駒』で創りあげた民権の祖であるがゆえに、坂本を外したとする指摘もある^{*34}。また紫瀾が土佐勤王党の弾圧に関わった後藤象二郎を怨悪し^{*35}、参議に坂本と後藤を並べなかった可能性もある。人名の削除問題については後考に俟ちたい。

Ⅲ. 筑前太宰府

1. 戸田の長崎行と上京

慶応3年(1867)8~10月にかけての坂本と戸田の動向を見よう。慶應2年(1866)7月、第2次長州征討での敗北による徳川公儀の威権喪失を機に、太宰府の政治状況が変化した。公儀は、同年10月に五卿を寛典に処し、尊攘運動の激発が憂慮された大坂護送を中止した^{*36}。徳川の軍事力という脅威が消失したことによって、三条の政治行動が活発化する。

翌慶應3年8月に三条は戸田に対して、従士前田杏斎の長崎到着を機に「外人事状」を内々に探索するよう内命を下す。後世、尾崎三良名義で語られた史談は二次文献ながら、今のところ長崎・京都における彼の動向を示すものである。

^{*31} 瑞山会編纂『維新土佐勤王史』(富山房、1912・新版2006)、8頁。武市瑞山(半平太)ら土佐の殉難者を追悼する瑞山会が、同書の編纂を紫瀾に託した(紫瀾は同書刊行の翌年に死去)。この巨冊を日本近代の史学に幾つか生じた維新史研究の系統でみると、藩閥(土佐自由党)のそれにあたる(大久保利謙「明治維新史研究の発展系統図」田中彰『明治維新観の研究』北海道大学図書刊行会、1987所収・初出1959)。

^{*32} 『坂本龍馬関係文書』1(日本史籍協会編)、417頁。

^{*33} 前掲千頭1914、283頁。また陸奥宗光の評として、新政府の役割を定めたとき世界の海援隊云々と言ったとの話も出ている(同、285頁)。千頭の手書は『維新土佐勤王史』より後の刊行ではあるが、エピソードは既に流布していたのかも知れない。

^{*34} 桐野作人「徹底検証 龍馬の三大争点」(『坂本龍馬伝(別冊歴史読本47)』新人物往来社、2009)。

^{*35} 前掲飛鳥井2002、20頁。

^{*36} 『回天実記』2(『野史台維新史料叢書』24、日本史籍協会編、東京大学出版会、1972)、120頁。

戸田の長崎発向は三条の内命を受けてのことであった。また戸田は福沢諭吉の『西洋事情』、また『博物新編』の学習によって外国人との交流等広範な見聞を望んでいた。ここに外国人の情勢および海外知識に通曉すべきことを「早悟って」いた三条からも、探索の要請が加わった^{*37}。ただ当時、戸田の抱く動機を「公言しようものならば忽ち有志者の反抗に遇い、或いは生命も危ういかもしれぬ」^{*38}から、長崎見物という名目をとって前田杏齋とともに発向した。戸田は長崎に派遣された後、土佐・京都へ周旋に向かう^{*39}。道中、ならびに京都で戸田は変名し、小澤庄次と称する。

坂本と戸田が共に行動を開始した時点は判明しない。坂本は9月15日、オランダ商人ハットマンよりライフル銃1400挺を18,875両で購入する契約を交わした^{*40}。このとき坂本は大政奉還論に立っていたが、しかし奉還を武力討幕と同じ意味とした点で後藤とは異なる^{*41}。同18日に坂本は岡内俊太郎と土佐に帰国するために安芸藩震天丸を借用し、さらに購入した銃を積んで長崎を発ち、帰藩の途につく。同船者は中島作太郎ら海援隊士であったが、ここに「三条卿の内命を受けて本藩船に依頼し京都に出んとする」^{*42}戸田が含まれる。

翌20日、震天丸は馬関に寄港して菅野・陸奥陽之助（宗光）は別船上坂し、24日に土佐浦戸港外に碇泊した。坂本は25日夜、密かに土佐藩の仕置役渡辺弥久馬、大目付本山只一郎と政情を談じた。同日、坂本は渡辺に「薩州の兵は二大隊上京、其節長州人数も上坂」と土佐に倒幕勢力の動向を報告している^{*43}。27日の土佐藩内では、次のような状況があった。

脱藩人坂本龍馬、宰府三条家附属之人某も来、要路の人に窺に面晤云う、頃日長薩芸三藩倍幕府の失体を憤うり、大挙して上京せんとするの議決せり。…先きに後藤象二郎薩人に会して大挙の期を覚するの論有、西郷某同之すれども、長薩の国論不服、遂に後藤等を大奸と目するに至、故に俄に去就を定めざれば災禍遠からざるを告、又幕府にも探知して親藩譜代諸侯の兵を召、戒厳密也。因て執政・参政会議し、政府騒擾大甚し^{*44}。

このとき坂本は、ハットマンより購入したライフルを藩に献上して再脱藩の罪を赦免されている^{*45}。藩政府は坂本より京都情勢の逼迫、薩摩・長州・安芸の三藩が軍事行動に乗り出したとの報を受けた。驚愕した藩は「国論大に挽回し、不日に兵を京師に出」し、仕置役乾退助に大隊司令を兼務させることに決定する。「十日位には出軍の事」と、出兵態勢に入っていた^{*46}。

坂本は29日に実家に帰宅、戸田も投宿、10月5日に両名は胡蝶丸に乗船して上坂することとなり上京の途につく^{*47}。この間、14日に大政奉還上表があり、倒幕勢力は挙兵の機を失う^{*48}。

^{*37} 「維新前実歴談」（Aa'、前掲『維新史料纂会講演速記録』3）、331～2頁。

^{*38} 同上。

^{*39} 『三条実美公年譜』（宮内省図書寮編、1901。宗高書房、1969覆刻版、429頁）。

^{*40} 「坂本龍馬海援隊始末」前掲『坂本龍馬関係文書』2、267～271頁。

^{*41} 8月、長崎に来訪した木戸孝允の扇動によるものである（前掲松浦2001、110頁）。

^{*42} 「佐々木高行宛岡内俊太郎書翰」前掲『山内』、614頁。

^{*43} 前掲「坂本龍馬海援隊始末」、280～1頁。

^{*44} 「下許武兵衛日記」前掲『山内』、621頁。

^{*45} 前掲「坂本龍馬海援隊始末」同、282頁。

^{*46} 「中村官兵衛書翰」同、638頁。

^{*47} 同、627頁。

16日に戸田は、相国寺を旅宿としていた西郷隆盛を訪ね、小松帯刀^{たてわき}とともども19日に同船して帰宰することを約しており^{*49}、そのため金の工面を必要としていた。坂本は「三条侯の身内小澤庄次と申もの、小松のたよりに西に帰り度ものとて是は相談して京に止まり居申度先刻申上候ものなり、右のものも何か買ものも致し又西行するに甘金かりてほしいと申候」と後藤に連絡する^{*50}。土佐藩士神山郡廉(くにきよ)は「三条様諸大夫戸田某宰府へ急て参侯に付、甘金受取度事」として、同藩士福岡孝弟へ示談し「同人密用金の中を甘金渡す筈に約」した。17日に福岡から戸田へ直接渡すはずが福岡も金に困り、神山の所持金から、じかに15両を福岡へ送金している^{*51}。19日の船には戸田・西郷のほか大久保・小松・広沢真臣らが乗船しており「甚騒々し」かった。ここで戸田は西郷から、薩長の大規模な出兵計画(討幕の密勅を受けた挙兵)を知らされ、これを三条へ伝えるよう請われている^{*52}。

「職制案」は以上の間に作成されたと考えられるものの、同時代の史料には見出しえない。また帰宰後の戸田の報告については、尾崎名義の談話筆記類では簡単に触れられる程度である。土方久元の日記『回天実記』から、戸田が主として大政奉還や薩摩の出兵上京に関する詳細をもたらしたことが判る。奉還については「幕之深意」を計りかねるとし「何に致せ將軍は非常之人なり、雖奸非凡」などと報告されている^{*53}。しかし「職制案」に関する記載はない。

2. 三条関白論の変化

さて、戸田の「職制案」を見た坂本は、

手を拍って大いに喜んで曰く、是れ今日に行ふべし。我断じて之を行ふことに尽力すべし。足下予と共に之を周旋すべしと。予曰く、予先ず太宰府に帰り今日の盛挙を主人に報告すべし。此事必成は乞ふ、足下を煩わさんと…

是に於て坂本は之を後藤象二郎に示す。後藤も亦大いに之を賛成し、直ちに之を朝廷に致し遂に廟議に採納する所となれり。唯其名を改めて職掌中の文字を取り、総裁、議定、参与として之を三職と云ふ。後参議に復し近年まで参議は位非常に低くして権重かりしなり(後日に至り後藤伯に予の草稿中関白、内大臣、議奏、参議の文字を変じたるの事情を聞きたるに、岩倉公之を見て大いに之を賛したるも、其名議陳腐なれば王政維新の際人の耳目を一新するの必要ありとて、其職掌中の文字を取って直ちに官名となし、総裁、副総裁、議定、参与と改めたるなりと)^{*54}。

^{*48} 長州藩の寛大処分と兵庫開港の勅許を慶喜が獲得し、攻勢の機会を失った薩長の目標は慶応3年夏、挙兵討幕に切り替わっている(『大久保利通日記』上、日本史籍協会編、慶応3年9月18日条)。10月に岩倉、中御門、大久保一蔵(薩摩)、品川弥次郎(長州)は洛北の岩倉幽閉地で「幕府ヲ討伐シ皇室ヲ興復スルノ順序ヲ謀議」した(『岩倉公実記』中、皇后宮職、1906、62頁)。

^{*49} 「王政復古の端緒」(Ab')、27頁。

^{*50} 『坂本龍馬全集(増補四訂版)』(平尾道雄監修、宮地佐一郎編・解説、光風社出版、1988)、324頁。

^{*51} 「神山郡廉日記」東大史料編纂所蔵『大日本維新史料稿本』(KE147)。

^{*52} 「維新前実歴談」(Aa')、42頁。

^{*53} 前掲「回天実記」2、211～2頁。

^{*54} 前掲『自叙略伝』上(Aa)、94頁。「王政復古の端緒」(Ab)で尾崎は「明治史要を見れば此職制の草案を拵へた者ハ中沼了三」とあり、中沼案を「岩倉公が懐中して出て直ぐに行はれた」と記されているという。一

坂本は「職制案」を後藤に伝え、後藤は復古政体の組織を思案する岩倉に伝えたという^{*56}。このとき後藤の「持論」として大政返上は「余程の英断で、皇国の為め誠忠の志を尽し、一点の私心なき事」を示した。つまり慶喜は「国家の忠臣」であるから「公平無私の御処置」をし、「公卿中の人物と諸侯中の人物とを先第一に廟堂に御登庸」せねばならぬという。「此精神」によって、戸田は「三条公を関白に擬し、徳川は内大臣の本官を以て其副」とする職制を主張した^{*56}。

しかし清華家の三条は関白に補されず、侍従→左右近衛権中將→権中納言→権大納言→（兼右近衛大將）と進んで大臣を極官とする^{*57}。清華家の公卿の関白補任は、「職制案」が古例に参照しない体制であることを表している。摂・関職に非五摂家を就けようとするのである。

三条を摂政・関白と同等に扱う案は、慶応3年5月初旬の時点で、薩摩藩の小松帯刀・西郷吉之助（隆盛）・大久保一蔵（利通）らが中心となって画策している。幕府が五卿の江戸召還計画（慶応元年（1865）1月）を中止したことを機に、薩摩は五卿問題への介入を行っていた。薩摩案は次のようなものである。

（略）

一、議奏伝奏の御進退

一、議奏衆には忠実の御方と、知略これあり候方一人ずつ御拔擢御座ありたき儀と存じ奉り候。

一、伝奏衆の儀、義気これあり決して節を変ぜざる御方、兩人程も御登庸相なりたき儀と存じ奉り候。

（付箋）

「議奏

正親町三条様

阿 野 様

醍 醐 様

万里小路 様

伝奏

烏 丸 様

しかし後藤の話では、彼が尾崎案を岩倉へ持参し「公が自ら筆を入れ…直ぐに行はれたといふ」（24頁）。中沼云々の記載は『明治史要』（修史局編、1876）に確認できない。『復古記』巻13には王政復古時の「詔勅、官制等」は、みな国学者・玉松操の「草する所に係ると云」とある（『復古記』1、内外書籍、1931、238頁）。

^{*55} 11月ごろ、洛北の岩倉本邸には倒幕派公家や諸士が往来した（前掲『岩倉公実記』中、102頁）。ここには坂本と中岡慎太郎も含まれている。また11月27日には正親町三条実愛と中山忠能が「王制組立」を議し、2日後の29日には正親町三条のもとを大久保が訪ね、有栖川宮熾仁親王・仁和寺宮嘉彰親王の人事を打合せている。12月1日に参内した正親町三条は、中山と会談して山階宮晃親王、有栖川宮の「両宮早参尽力のこと」と記す。彼は3日も中山・中御門・大久保と謀議しており、皇族を新政府に引き入れるべく運動している（前掲「嵯峨実愛手記」、及び船津1971参照）。

^{*56} 「維新前実歴談」（Aa'）、39頁。

^{*57} 李元雨『幕末の公家社会』（吉川弘文館、2005）、30頁。

中御門 様」

一、御補佐

三 条 様

右三条様には御禁錮中にて、決して御登庸成らせられ難く、夫々御格もこれあるもの故、一己の御見込を以て御計らい出来兼ね候とか、又は先帝の御機嫌に相触れ候処もこれあり、御孝道の上御差し障り在らせられ候とか、いずれ御拒み成られ候御言葉在らせられ候わんか。其の節は委敷御弁明在らせられたく、此の時勢に臨ませられ、人材と思食され候わば、御旧格に御拘り在らせられ候儀にこれなく、御政事挙り御一新在らせられ候処、第一の御格、只習弊を以て公論を御破り成られ候義にては、決して相済まざる訳に御座候間、私論を捨てて公平至当の御所置施させられ候処、得と御理解御座ありたき義と存じ奉り候。

右両条は、朝廷の御急務、興廃の機此の時に御座候間、先ず大事のヶ条を以て御立て貫き在らせられ候えば、是より万機を生じ申すべき儀と存じ奉り候…^{*58}。

四侯会議に臨む島津久光に向け示された案である。議奏人事とともに三条を天皇の補佐にしようとする。これを久光は、私論・旧格に求めない、四侯の「公論」に基づく人事として摂政の二条斉敬^{なりゆき}に提示した。ここで三条の「御補佐」就任は秘されている。再び西郷は長州への寛典と合わせて五卿を帰洛させるよう、久光へ建言した^{*59}。

五卿が動けば、すぐさま長州へ取り込まれる可能性が残されている。薩摩は長州処分を最優先し、三条を天皇の「補佐」に用いて朝政を挽回しようとした。慶応3年2月に薩摩の周旋を聞いた坂本は、

筑前の三条卿ハ御帰京の上ハ、天子の御補佐とならせられ候よし、此儀ハ小松、西郷など決して見込ある事のよし。然レバ先ヅ天下の大幸ともいうべきか、可楽々々^{*60}。

と賛意を表した。しかし朝議では議奏・伝奏の新人事が議されたすえ、万里小路・烏丸は卑官であるという理由により鷹司輔熙^{すけひろ}が反発し、また中御門経之・大原重徳^{しげとみ}については過激論を主張するとして反対され、正親町三条・徳大寺のみ採用が決定する^{*61}。

議奏人事について、「職制案」と薩摩案とでは中御門・正親町三条の登庸が共通し、復古後の政体にはこの両名と烏丸・万里小路が加わる。さらに関白については上述のように当時、摂政の二条斉敬が幼年であった明治天皇の補佐を行ったため、置かれていなかった^{*62}。戸田は大政返上後の新体制に臨んで、5月初旬の薩摩案の線上に、三条の関白補任を置いたのである。

しかし朝廷は大政奉還後にあっても政事に「御不案内」であり、「一小事の御裁決」も難しい

^{*58} 『西郷隆盛全集』2（同全集編集委員会編、大和書房、1977）、194頁。

^{*59} 前掲『西郷隆盛全集』2、200頁。

^{*60} 前掲『坂本龍馬全集』、174頁。

^{*61} 勝田孫弥『大久保利通伝』（同文館、1911）、103～4頁。

^{*62} 「維新前禁裏御内職務概覧」（年末詳）に、摂政は「幼帝ノ御名ニ於テ万機ヲ裁断スルノ職ニシテ、其責任ノ重キコトハ関白ノ上ニ在リ」と説明がある（下橋敬長述・羽倉敬尚注『幕末の宮廷』東洋文庫、1979所収、353頁）。

状態である^{*63}。朝廷は、いわゆる討幕の密勅への見合わせを薩長に沙汰しつつ、諸政を徳川に委任せざるを得なかった。とはいえ、幕府の威権回復を目論めば人心は服さず、天下に騒擾が起こると危惧された。

それゆえ慶喜は、諸侯が上京して政治問題を「公議」することが「御私なく御奉還之盛意」^{*64}が立つとみた。この意図のもと、諸大名招集の朝命が出された。それは諸侯に出兵を促し、その兵威によって王政復古の変革を図る「威力奉還」の線である^{*65}。

他方、五卿の召還は、彼らの帰洛意志とは裏腹に遅れを見せていた。前述した朝議での決定や四侯会議の瓦解、また薩摩側の慎重な対応が延引の理由である。三条の病気も重なった。大政返上の報が太宰府にもたらされるや五卿は、諸大名招集の朝命に応ずる島津久光帯同で上京を企てたものの、長州藩の指示によって中止した。京都では10月22日の朝議で、三条らは諸侯上京まで大坂滞留となり^{*66}、王政復古後の朝命まで洛外に留め置かれた。

この情勢のなか、坂本の政治論はいかに推移したか。「船中八策」^{*67}は政権奉還によって「政令」が朝廷から出されること、また上下議政局を創設し、その議員が万機を「宜シク公議ニ決」することとした。顧問に諸侯および天下の人材を備え、彼らには「官爵」、すなわち官職と位階を授け、有名無実の官は廃す。「職制案」では大夫、士庶人といえども賢であることを尊重して次官とする。同年11月の「八義」で、坂本は人材登庸・外国交際・上下議政局の創設といった各項を草し、ここでも有材の人物に官爵を与えるとした。

この「八義」作成の直前、坂本は内大臣慶喜を関白に据えようとする案を持っていたようである。公議政体論に立つ松平慶永（春嶽、前福井藩主）を上京させるため、坂本が土佐藩使者として福井に赴いた際、慶永に以下の案を伝えた（同年10月28日）。

小松・後藤等、上様ノ御反正ニ奉感、此君ヲ奉助ヨリ外ナシトノ決心ノ宜、弥以將軍職迄御辞退ヲ奉願度旨也。…

上様ヲ関白、諸侯ノ宜方ヲ兩役トシテ、上様ヲ奉助ト云、各藩小松ト後藤斗ト云、長州ハ桂〔小五郎〕位ノコト…^{*68}、

^{*63} 「丁卯日記」10月28日条（『再夢紀事・丁卯日記』日本史籍協会編）。

^{*64} 同上。

^{*65} 高村直助『小松帯刀』（吉川弘文館、2012）、207頁。同書で高村は一貫して、当時の倒幕計画の実現性は低く、現実には大政奉還こそ王政復古を導きだす唯一の道とする。

^{*66} 『法令全書』慶応3年（内閣官報局編、1887）、第3。

^{*67} 「船中八策」と「八義」は前掲『坂本龍馬全集』に拠る。「船中八策」は俗称であり、実際に作成されたか疑わしい文書である（前掲松浦2008、144頁）。が、ここでは「官爵」授与の策を確認すべく引用した。石津達也は「船中八策」や松平春嶽らに、横井小楠における「公（公共）」思想の波及を捉えている（『日本と中国における改革思想と伝統的権威』『季刊日本思想史』60、2002他）。また坂本と同じく土佐勤王党メンバーであった中岡慎太郎は、頑強な攘夷論者から一転、内政変革への希望を抱く開国論者となった。『坂本龍馬伝草稿』（Ad）は中岡も加わり「新官制ノ意見書ヲ作ル」とするが（1023頁）、しかしその根拠は不明である。中岡については Marius B. Jansen, Sakamoto Ryoma and the Meiji Restoration（Columbia Univ Pr, 1961; New Ed, 1995）（マリウス・B・ジャンセン著、平尾・浜田訳『坂本龍馬と明治維新』時事通信社、2009・初刊1961）、亀尾美香「中岡慎太郎の討幕思想と周旋活動—慶応二年一月以降を中心として」（『中央大学大学院研究年報（文）』29、2002）、三谷博「日本世論の二重反転」『大人のための近現代史（19世紀編）』（東京大学出版会、2009）を挙げておく。

^{*68} 『越前藩幕末維新公用日記』（福井県郷土誌懇話会、1974）、433頁。

公家社会における政治の頂点にある関白は、議奏・武家伝奏の「両役」という補佐役を得て、御所に参内し政務を執る^{*69}。関白を慶喜とし、諸侯から抜擢された両役がこれを補佐するという^{*70}。小松・後藤・桂は参議格として挙がったのであろう。すでに奉還勅許の翌16日、坂本・神山・小松の会談にて、諸侯出京による兵威のもとで「議事官」が備わり次第即時解兵を見込んでいる^{*71}。大政奉還まで倒幕論の保持者であった坂本は、慶喜の「絶倫之御英断」^{*72}を激賞したとされる^{*73}。坂本は、徳川を温存した政体を実現すべく、後藤らの「公議」運動に投じるのである。

後藤や福岡孝弟らの描く新たな体制は、諸侯上京のうえに成立する大名会議を軸にしている。その見込みによれば、議事院を上院と下院に分け、上院は摂政二条齐敬・徳川慶喜の「主宰」で諸侯が参加し、下院は諸藩士から草莽まで出役する。ただし、まず「有名諸侯」が会同して議事院で「篤と御決議」し、それを天皇の簾前で誓約し「御確定」する。このことを他の大名には下問で済ませ、欠席諸侯には通達で構わない。違背する者は追討されるだろうという^{*74}。後藤はまた「天下之英傑」慶喜を議事院の惣宰に充てたい、とした^{*75}。

それは軍事を伴う「公議」論である。11月に坂本が起草した「八義」は新たに「無窮ノ大典」を定め、諸侯はこれを奉ずるとしながら、こう記す。

右預め二、三の明眼士と議定し諸侯会盟の日を待つて云々、〇〇〇自ら盟主と為り此を以て朝廷に奉り、始て天下万民に公布云々、強抗非礼公議に違ふ者は断然征討す、権門貴族も賃借する事なし。

「〇〇〇」は内府公、すなわち慶喜とみてよからう。しかし同月13日に、島津忠義（薩摩藩主）が挙兵上京の途に就く。薩摩は、禁裏御所を制圧し新政体を樹立するクーデタ構想を持っていた。坂本が横死した15日、中根雪江（越前藩家老）との談話で永井尚志（大目付）は「例

^{*69} 前掲李2005、87頁。

^{*70} 慶喜は、公儀の威権低下と挙兵倒幕運動への対抗として朝幕融合策を模索した。ここには左右関白を分立させ、右関白を将軍兼任とする案が含まれた（宮地正人『幕末維新変革史』下、岩波書店、2012、49頁）。同時期、慶喜を関白とする案は後藤の持論でもあった様だが、しかし乾（板垣）退助ら藩内の倒幕勢力から抵抗を受けている。大政返上後、徳川への諸政委任のもと諸侯結集を狙い、慶喜関白論が坂本の「秘策」の持論として再浮上したと思われる。参照、『保古飛呂比—佐佐木高行日記』2（東京大学出版会、1972）、慶応3年8月23日条。

^{*71} 前掲高村2012、210頁。帰宰の件で戸田が西郷を訪ねたのと同じ日である。

^{*72} 前掲「丁卯日記」10月28日条。

^{*73} 参照、坂崎斌（紫瀾）『鯨海酔侯』（高知堂、1902）、271頁。中島信行の談話による。坂本の倒幕論に、大政奉還運動が不成功ならば「耶蘇教ヲ以テ幕府ヲ倒ス後害アラン」がよく知られる（前掲『保古飛呂比』2、慶応3年8月30日条）。このとき、ともに酩酊した佐々木高行と議論を闘わせるも、宗教による人心扇動策が発展した跡は見いだせない。翻って石井（1972）が、幕臣の名がない「職制案」に倒幕の契機をみるのは妥当であろうか。同案において、各職の人名列挙の末尾に付された「等」の字は登用範囲の拡大を示唆しよう。坂本は、小松・後藤における「威力奉還→王政復古」の運動に与したのである。

^{*74} 「丁卯日記」11月9日条。

^{*75} 『改訂肥後藩国史史料』7（細川家編集所編、鳳文書院、1990）、614～5頁。賀陽宮の「王政復古者至極の事に候得共、名実相違幕府より政権を帰候ても八百万石は差出不申、諸藩も同様…只今の通にては天下を郡県になし実の王政復古出来間敷、如何」との問いに対する、後藤の返答（慶応3年11月3日）。後藤は、「大樹公者天下之英傑に付、外に成し候儀は決して不相成」と強調し、「宮様ヲ奉初大樹公なと議政所惣宰」に据えたいと述べた。

之兵威を以て事を成候而は、朝廷へ対し相済不申、決して兵力によらずして可被行条理ありと申候…」と述べる。これを受け中根は「〈私云、窃に按ずるに、龍馬の秘策持論は…内府公関白職の事か〉」と推測した^{*76}。薩摩は長州と出兵協定を結び（18日）、忠義の入京後にクーデタの方針を決定する（27日）。

後藤らの「公議」運動は、このような薩摩への対抗であった^{*77}。坂本の持論は関白慶喜と、有材の諸侯からなる議奏・伝奏両役を据える体制を朝廷に生むことである。五卿の帰洛が滞るなか、坂本による関白の想定は内戦を阻むとともに「公議」の首とさせるべく、三条から慶喜へ転ずるに到った。

IV. おわりに ―官爵と公論―

「職制案」は様々な異同のために、原本の存在が疑われかねない性格を持つ。傍証の欠如は、この案が政治社会に広く認知されたかどうかを測れなくする。そもそも案が三条の目に触れたのか、また彼がこれを承認したか否かが判らない。

そのような曖昧さのある「職制案」が素描した政治は何であろうか。それは関白三条と内大臣慶喜が並ぶ「公平無私」を期した政体に、官爵を授かった議奏・参議が加わる「公議」政である。その特質は、「士庶人」を包む参議に政治参加の論理をみた復古性にある。

慶応期は政治問題の複雑化に伴い、諸大名が極位・極官を超越して朝議参加を果たす時期でもある^{*78}。官位制の流動は、坂本らの私案を生む背景をなすであろう。天下の人材に官爵を与え朝臣たらしむべしとする坂本の論に、戸田が具体化の道筋をつけようとしたのであった。後に尾崎名義の談話は「此職制を拵へた精神は明治十八年太政官廃止の時迄行はれて居った。即ち参議は常に門地卑き人が任ぜられて位は纔に正四位に止」まれど、「実力は却て此人々に存」としと強調する^{*79}。

尾崎は坂本遭難の報に接し、「官制改革」の論が水泡に帰したと慨歎したという。しかし12月下旬に福岡から来訪した大山巖・西郷従道から「太政官ニ於テ総裁議定参与ノ三職ヲ置キ…向キニ歴数スル所ノ人物大概子其職ニ在リト。是ニ於テ、三良等ノ草起スル所ノ論幾分カ其効アルコトヲ知ル」^{*80}。しかし新政府は徳川の実権の一切を排除し、「後藤象二郎の計画した平和論」も失敗した^{*81}。「予の立てた職制」は関白・内大臣改め総裁・副総裁となり「慶喜一人は退けられ」、他は皆「列記して置た人が用ひられて天下に発布になった」^{*82}。尾崎は、自ら草した

^{*76} 前掲「丁卯日記」11月15日条。

^{*77} 高橋秀直『幕末維新の政治と天皇』（吉川弘文館、2008）、360～3頁。

^{*78} 浅井良亮「幕末武家官位試論―武家官位叙任をめぐる政治力学」（『鷹陵史学』36、2010）。

^{*79} 「王政復古の端緒」（Ab）、24～25頁。参議は、明治2年（1869）7月官制の重要官職として、大臣・納言とともに置かれた。

^{*80} 以上は「大政返上後官制改革事情一斑」（Ac）、4丁表。

^{*81} 多数の藩は事態を観望して出京せず、後藤らの諸侯会議即時招集構想は挫折した（前掲高橋2008、366頁）。

^{*82} 以上は「王政復古の端緒」（Ab）、30～31頁。

職制が復古政府に反映しても、それが公平な体制に繋がらなかったと評価したのであろう^{*83}。

一方、官位制は、朝敵大名からの官位の剥奪という処罰形態とともに、新政府に連続する^{*84}。政府は鳥羽・伏見戦に勝利した直後から、政府側の大名に異例の官位昇進を認めた。一定の位階に一定の官職が対応する官位相当制では、任官によって官僚組織内での位置と職務を定め、叙位によって朝堂内の座居、座次を決める。位階（クライ）はクラ（座）＋イ（居）であり、位階の順に列して天皇からの距離を物理的に表す^{*85}。無位の参与は昇殿できず、正殿の階下の砂上に円座を敷き、朝議に列する^{*86}。

慶応4年（1868）正月17日の「三職七科」の制は、いわゆる「名鑑」という巷間に流布した名簿に、その姿を捉えられている。明治期に作られた官員録、今でいう職員録の前身というべき名鑑は公家社会の枠組を保つ、コンパクトな人名簿である^{*87}。表3に掲げた『雲上便覧大全』慶應4年版は、それまでの公家名鑑に七科の制を臨時につづる。この中で大納言・中納言・参議は「卿」、四位は「朝臣」と官途を付し、序列をつけている。

このとき新たな位階制が機能していたわけではない。同時期、福岡孝弟の意見書は「土地人民ノ私有」・「浮食游民」・「浪士横議」あるべからずと述べ、次をもって「要トセン」とする。

一、爵ヲ以テ人則ヲ立ツベシ。〈人爵中天爵ヲ撰挙スベキ、是要トス〉

王親王諸王 公卿上下 大夫上中下 士上中下

帯刀以上ノ者、皆此ノ朝爵ヲ受クベシ。其他帯刀浪士ノ名アルベカラズ。従僕帯刀ノ者ノ如キ、亦下士ノ下ニ准スベシ。〈十津川郷士ノ如キハ土着ノ親兵トセン。社人・僧侶ノ如キ、亦其制アルベシ。〉

^{*83} 尾崎が維新史を詳密に回顧できたのは、相応の準備あつてのことであろう。史料Aの各種は作成環境によって分量と内容を異にしている。ただAが講演や自伝向けであることも手伝ってか、「職制案」の成立とその後日談の展開が相似する印象がある。Acの執筆時点（1879）で、後年の著述や談話のプロットが既に出来上がっている。決まった筋を使い続けた理由に、維新における自らの貢献を証することがあろう。ところが、本稿でみたように「職制案」の裏付けは皆無である。尾崎は慶応期の史料をも用いたかも知れないが、しかし、以上は彼が繰り返し「職制案」を語った動機を説明するに十分ではない。

いま一つの理由は、三条の顕彰ではなかろうか。明治期の三条は、政治の決定的瞬間に昏倒するなど失態を犯し声望を低下させた。その故か、現代にあつて「路傍の瓦礫並みに黙殺されている」（前掲佐々木2002、235頁）。前掲『自叙略伝』（Aa）には憤然と明治政府内での三条への冷遇を難じた、薩長批判というべき箇所が見出せる。尾崎洵盛の危「現存諸家の内事および批評」の一端である。ここには負の三条像を糾す意図があろう。尾崎は、三条の「維新前後の赫々たる復古の功業も自然忘れらるる」（前掲『自叙略伝』中、212頁）ことを恐れ、維新を振り返ったのではないか。それは尾崎の「政治的正義」である（参照、山崎正和『歴史の真実と政治の正義』中公文庫、2007、初刊2000）。

その三条を関白に固定した「職制案」を史実とすべく、尾崎は（慶応3年からとすれば半世紀にわたり）同案を抱えてきたように思える。記憶の中にだけ存する原典に改訂を加え、紙上に再現することも可能である。昭和に入つて維新史料編纂事務局が『維新史』（Aa2）に同案を取めたのは、それまでに蓄積した尾崎の著述類を、揃つて参看しえたためであろう。大正期に維新史料編纂会委員でもあつた尾崎の宿望は、死後四半世紀近く経て達せられたといえよう。顕彰という意味合いは、前記した池辺三山らの三条評にも窺える。「職制案」にまつわる史学史と政治はさきの坂崎紫瀾と併せ、また別に論ずべき事柄である。

^{*84} 箱石大「幕末・維新时期における武家官位の変質」橋本政宣編『近世武家官位の研究』（吉川弘文館、1999）。

^{*85} 斎川真『日本法の歴史』（成文堂、1998）、103～105頁。

^{*86} 藤井譲治「明治国家における位階について」（『人文学報〈京大〉』67、1990）・西川誠「明治期の位階制度」（『日本歴史』577、1996）。

^{*87} 尾佐竹猛「官員録の研究」『明治文化叢説』（『尾佐竹猛著作集』23、ゆまに書房、2006・初刊1934）。

一、官位ヲ以テ補職叙任ノ法ヲ定メ、位祿官給ノ制ヲ立ツベシ^{*88}。

帯刀以上の者が爵位を受けるが、ここから生得の才たる「天爵」を選びだす制、また「補職叙任」・「位祿官給」の制を立てよという。この案をおそらく基調とし、福岡と副島種臣（ともに制度寮参与）が作成主体となった「政体」（同年閏4月）で、官位授与が制度として定まった。「政体」は爵位を私に与えることを禁じ、無位の参与にも位階を授けている^{*89}。立法・行法・司法の「三権」を司る太政官に「天下の権力」が集まる、強い政府を望む新政権にとって位階は、浪士横議を阻み、公論を尽くすための策である。

そのような政府の首脳を三条とともに任じた岩倉によると、公論は、朝議の決定に天皇が親裁を与えることで導かねばならない^{*90}。天裁が下れば、私議による揺るがしも回避されるのである。至当な「公議」を尽くすならば、位を持つ「朝臣」の議事から君主が公論を汲むための「法」を立てねばならない^{*91}。限られた官員の間で私心なく意思を分かち合った状態は、「三職之公論」^{*92}などと言い表せよう。残されたのは「公議」への「士庶人」の参入という問題であった。

【附記】

紫瀾における坂本の扱いは、知野文哉『「坂本龍馬」の誕生—船中八策と坂崎紫瀾』（人文書院、2013）が初めてまとめた検討に付した。新官制擬定書をも取り上げた同書には「官制改革事情一斑」（Ac）が前後の文を含め引用されている（250～2頁）。また著者は「坂本龍馬伝草稿」（Ad）の原文書を諸文献に照合し、作成年代を明治33年（1900）以降と推定した。その上で、岩崎鏡川と紫瀾の著作に収められた新官制擬定書の人名がAdと同一であることを突き止める。そして「坂本龍馬海援隊始末 初稿」（Bb'）を取り上げるも、乙本のみである点が惜しい。他方で著者は、山内兵之助の選定をめぐる土佐藩情に踏み込み、兵之助は後藤・坂本に次ぐ第三卒として、山内家中を納得させる人材であると指摘した。

^{*88} 『福岡孝弟意見書』（明治元年正月カ、東大史料編纂所蔵・維新史料引継本—Ⅱへ—8）。また128クータ直後に議定・仁和寺宮は、有為の人材を選び出すのはこの上ない「国家之大幸」だが、しかし朝廷という政治空間に参入させるべく官位に叙し朝臣とすべし、と主張している（前掲『復古記』1、284頁）。

^{*89} 「政体」（『日本史史料4近代』岩波書店、1997所収）。

^{*90} 「国事意見書」前掲『岩倉公実記』中、684～685頁。

^{*91} この問題は拙考「公議機関の閉鎖—新旧『公議所』と集議院」（『日本歴史』2013年刊行予定）に詳論した。議事制という「法」の必要は、例えば慶應2年（1866）の大久保利通の建言（「公論採用に関する意見書」『大久保利通文書』1、日本史籍協会編）や、洋学者の西周が慶応3年に記した「議題草案」が説いている（『西周全集』2、宗高書房、1971所収）。

^{*92} 『大久保利通文書』2（日本史籍協会編）、247～249頁。この三職は明治2年7月官制での大臣・納言・参議。

“A Plan For New Government” (職制案) written by Ozaki Saburo (尾崎三良) and Sakamoto Ryoma (坂本龍馬) before the Restoration of Imperial Rule in Japan,1867

Hiroataka TERASHIMA

This paper is extended to the philosophy of “Kougi Seitai” (a thought of the parliamentary system 公議政体) to carry out “Kougi” as the open forum in the New Government before the Restoration of Imperial Rule (王政復古) in Japan,1867. Concretely, reevaluation of the “Shoku-Sei-An” (New government organization idea) which was authored and edited by Sakamoto Ryoma (坂本龍馬) together with Ozaki Saburo (尾崎三良) from political history view. It considered specially one of the precondition of publishing the “Shoku-Sei-An” the political activities taken by Sanjou Sanetomi (三条実美) especially after his banishment to Dazaifu (太宰府) caused by coups of 18th August 1863 (Bunroku-3).

In this study, it is considered how the political situation in Dazaifu area had exerted the influence on to the system of the “Shin-Kansei An” as well as to the publisher of the document by examining historical materials in which the document “Shin-Kansei An” was published. Here, it was focused to (1) chronological background and (2) political background of the new government organization idea. In this point the power of five court nobles at Dazaifu existed as the symbol of political activity of taken by Sakamoto and his group members. In connection with this, Toda who was Sanjo’s vassal together with Sakamoto maneuvered that Sanjo shall be nominated as the Chief adviser of the Emperor (kanpaku) of the New Meiji Government.

However, the achievement of this conspiracy has been ended with the dream, because the time frame when the five court nobles return to Kyoto from Dazaifu has been postponed and this resulted difficult to realize the idea of the “Shin-Kansei An”. Sakamoto and his colleague members of the group named Kaiken Tai (海援隊) has developed this project collaborating with the members of the Kougi Seitai group such as Gotou Shoujirou (後藤象二郎) of the Tosa Clan (土佐藩), however, finally they concluded the project to summarize this to the plan to select Tokugawa Yoshinobu (徳川慶喜) as the Chief adviser.